

今週の為替相場見通し (2017年2月13日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		111.59 ~ 113.85	113.19	112.00 ~ 115.00
ユーロ	(ドル)		1.0608 ~ 1.0804	1.0643	1.0400 ~ 1.0750
(1ユーロ=)	(円)		119.33 ~ 121.44	120.49	118.50 ~ 122.00
英ポンド	(ドル)		1.2347 ~ 1.2582	1.2485	1.2350 ~ 1.2550
(1英ポンド=)	(円)	*	138.55 ~ 142.38	141.37	140.00 ~ 142.50
豪ドル	(ドル)		0.7605 ~ 0.7690	0.7678	0.7600 ~ 0.7850
(1豪ドル=)	(円)	*	85.24 ~ 87.19	86.89	86.00 ~ 89.00

(データ) 先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替市場第一チーム 渡邊 康太

(1) 今週の予想レンジ: 112.00 ~ 115.00 円

(2) ポイント [先週の回顧と今週の見通し]

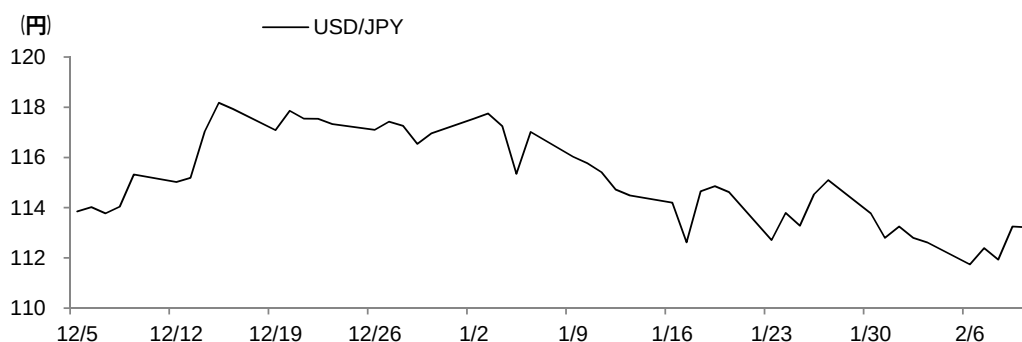
先週のドル/円相場は上昇した。週初6日、ドル/円は112円台半でオープン。仏大統領選を前に極右勢力の台頭が懸念され、欧州を中心にリスクオフの流れが強まり、ドル/円は112円を下回った。7日は前日の流れを引き継いで、111.59円と年初来安値を更新。しかし同水準では押し目買いが観測され、その後もドル買い戻しが優勢となる中、短期勢のストップロス巻き込んで112円台半ばまで反発。カシカリ・ミネアポリス連銀総裁のハト寄りの発言がドル売り材料となる一方、英中銀(BOE)のフォーブス委員によるタカ派的な発言がポンド/円のショートカバーを誘発したこと、ドル/円は112円ちょうどを挟んでボラティルな動きとなった。8日は日銀による円債市場での指値オペから、日米金利差拡大を背景にドル/円が上昇する場面も見られたが、前日高値水準の112円台半ばで上値が押さえられると、全般的にドル売りが強まり再度111円台半ばを試す動きに。北米時間に入り、米10年債入札では需要の弱さが確認され米金利が上昇すると、ドル買い戻しの動きが強まり112円ちょうどを中心とした値動きとなった。9日はトランプ米大統領から大幅減税を期待させる発言があったことで米株が最高値を更新し、ドル/円も急速に買い戻され、1週間振りに113円台を回復した。10日は前日の流れを引き継ぎ113.85円の高値まで上昇。もっとも、北米時間午後スタートしたトランプ大統領の記者会見にて、中国の通貨安政策が批判されたことで、リスク回避の動きから円買いが強まり、ドル/円は112.85円まで急落。しかし特段目新しい材料でもなく、米株も堅調に推移する中、ドル/円は値を戻し113.19円で越週した。

今週のドル円/相場はやや底堅い値動きを予想する。先週のドル/円は欧州政局不安から売られた後、トランプ大統領の経済政策に対する期待から買い戻された。週末に行われた日米首脳会談では、為替や自動車貿易などへの言及が少なかったことで、一旦は日本の通貨安政策批判への懸念が後退した格好であり、米国における大幅減税への期待感も継続する中では、基本的には米金利が上昇し、ドルは買われやすい地合いが継続するものと思われる。一方で、欧州を巡る政治不安がリスクアセット全般の上値を押さえる可能性も残る中、次の材料が出てくるまでドル/円が大幅に上昇するとも考えにくい。今週はイエレンFRB議長による米議会証言が控えているが、足許のFRBスタンスを大きく変える材料は特になく、また市場における3月会合の利上げ織り込みも3割程度に止まっており、ハト寄りな発言が出たところでドル売り余地は小さいものと思われる。需給面でも下値を支える向きが相応に見られる中ではダウンサイドリスクは限定的だろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(2/6~2/10)の値動き:

安値 111.59 円 高値 113.85 円 終値 113.19 円



(資料) ブルームバーグ

2. ユーロ

為替営業第二チーム 高田 裕

(1) 今週の予想レンジ: 1.0400 ~ 1.0750 118.50 ~ 122.00 円

(2) ポイント [先週の回顧と今週の見通し]

先週のユーロは対ドルで下落する展開。週初6日、対ドル1.07台後半、対円121円台前半でオープンしたユーロは、シドニー時間に週高値となる対ドル1.0804、対円121.44円まで上昇するも、仏大統領選挙(4~5月に実施予定)における極右政党候補の当選に対する警戒感から、リスク回避の動きが強まると、対ドル1.07台前半まで下落した。その後はドル売り優勢地合いとなり、対ドル1.07台後半まで反発。翌7日には1.06台後半まで値を下げる場面が見られるも、米長期金利低下を受けたドル売りやバイトマン独連銀総裁の「インフレが上昇したら、緩和的な政策は終わらせるべき」との発言に、対ドル1.07台前半まで上昇した。週央8日にかけては、欧州政治やギリシャ債務問題への懸念が浮上すると、ユーロは対ドル1.06台前半、対円週安値119.33円まで下落したが、その後は米長期金利の低下を受けて直ぐに1.07台前半まで値を戻した。しかし、その水準では売り意欲も強く、1.06台後半まで押し戻された。9日は、トランプ米大統領の大幅減税を示唆する発言や米長期金利の上昇を背景にドル買いが強まると、ユーロは対ドル1.06台半ばまで下落。週末10日も下げ止まらず、対ドル週安値の1.0608まで下落すると、そのまま安値圏で推移し結局対ドル1.06前半、対円120円台前半で越週した。

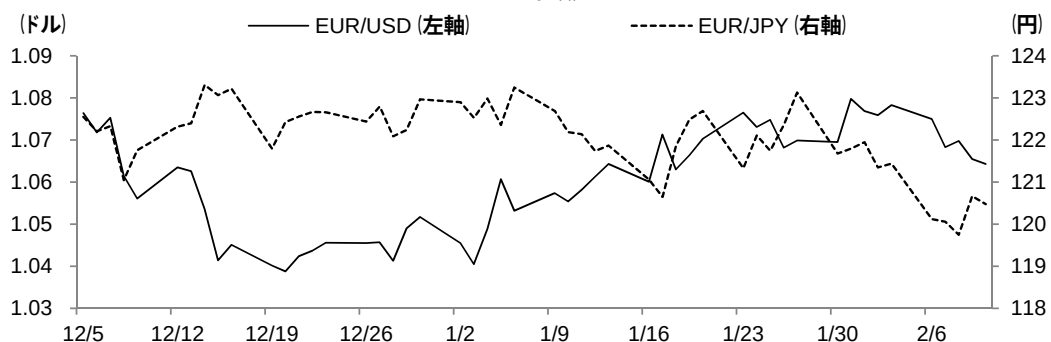
今週のユーロは方向感を探る神経質な相場展開を予想する。予定される経済指標やイベントとしては、14日(火)にユーロ圏12月鉱工業生産、ユーロ圏10~12月期GDP(2次速報)、独2月ZEW景況指数、15日(水)にユーロ圏12月貿易収支、16日(木)にECB理事会議事要旨(1月19日開催分)などがあるものの、特段注目すべき材料とはならないかも知れない。むしろ足許のテーマは、経済というよりも政治に重きがあると言えよう。欧州域内ではポピュリズムの台頭が危惧される状況下で来月以降に控えるオランダ、フランス、ドイツなどの選挙動向が注目であり、各国でユーロ圏離脱の機運が高まる局面ではユーロ売り優勢の展開が予想される。一方、域外ではトランプ政権の通商政策について引き続き目が離せない。米国による対ユーロ圏貿易赤字への批判が強まればドル安相場からユーロがサポートされると思われる。先週9日のドイツ連邦統計局からの発表によると2016年のドイツの貿易黒字が+2530億ユーロと過去最大になっており、先月末にトランプ大統領直属の組織、国家通商会議(NTC)のナバロ委員長から指摘された「ドイツは甚だしく過小評価されている」暗黙のドイツマルク(ユーロ)によって他のEU加盟国や米国から搾取し続けている」という見解を裏付ける形となった。今後、より一層トランプ政権からの風当たりが強まることが予想され、積極的なユーロ売りも難しいであろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(2/6~2/10)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0608 高値 1.0804 終値 1.0643

(対円) 安値 119.33 高値 121.44 終値 120.49



(資料) ブルームバーグ

3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.2350 ~ 1.2550 140.00 ~ 142.50 円

(2) ポイント [先週の回顧と今週の見通し]

先週の英ポンド相場は、対ドルで横ばい、対円、対ユーロでは若干水準を切り上げた。ドル全般の堅調は、特に週の後半に向け、トランプ米大統領による大胆な税制改革予告発言(9日)を受けた米景気拡大期待が大きく寄与した模様。円やユーロが対ドルで水準を切り下げる一方、ポンドはいわばドルと並んで堅調にとどまった格好だが、その要因を取って探すなら、英中銀フォース委員の発言が挙げられたのではなかろうか。7日、同委員は「実体経済が堅調を維持し、名目の経済指標が上昇を継続すれば、近い将来の利上げを示唆する可能性がある」などと発言、俄かに英中銀利上げ期待感を高めた。同発言が聞かれる直前、ポンドは全面安に振れていたが、このポンド安は、前後して発表されたハリファックスの1月住宅価格指数の下振れ(季調済前月比-0.9%)に失望した値動きと考えられた(ただし、ポンド下落は同指数発表に30分ほど先行しており、事前の指数漏洩の可能性も考えられた)。この局面、ポンドは対ドルで1.2347、対円で138.55、対ユーロで0.86395とそれぞれ週の安値をつけている。その他、先週は王立不動産鑑定士協会(RICS)の1月住宅価格(9日)、英12月貿易収支(10日)、英12月製造業/鉱工業生産(10日)などの英経済指標が発表された。とりわけ、12月製造業/鉱工業生産は市場予想を明確に上振れ、英経済の堅調ぶりを確認したものの、通貨市場の反応は限定的だった。

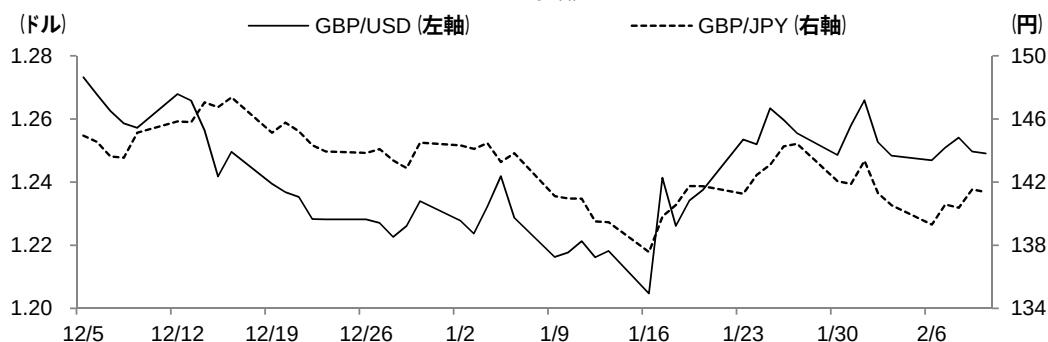
今週の英ポンド相場は、方向感を欠いた膠着を予想。先週9日、英中銀フォース委員は今年6月末で退任する意向を明らかにしている。仮に先週のポンド堅調に、7日の同委員による早期利上げ予告発言が少なからず影響していたのであれば、同委員の退任発表を受けてポンドが軟調に反応しても不思議ではなかったはず。しかし、ポンドは9日以降も(特に対円、対ユーロで)堅調推移を支配的とした。そもそも、フォース委員はタカ派の筆頭と目されていた上、9人いる金融政策委員会メンバーの1人に過ぎない。こうした事実を鑑みるに、先週、対円、対ユーロなどでポンドを買い上げた反応は過剰に映る。そこにポンドの堅調地合、或いはポンドを売り込む圧力の不足を読み取るのは、些か恣意的に過ぎるだろうか。一方で、英政府によるリスボン条約50条(離脱条項)発動を数週間後に控えて、自信を持ってポンドを買い上げるのも難しい。50条発動後、各国との貿易協定やEU補助金の扱いなどを巡る交渉が本格化するはずだが、現時点では不透明なことがあまりにも多過ぎるからだ。13日(月)には、デビスEU離脱相の演説(於ヘルシンキ)が予定されているが、彼の口から具体的な方針などが示される可能性は極めて低いだろう。その他、今週は、14日(火)に英1月消費者物価指数、15日(水)に英10~12月失業率(ILO基準)、同平均賃金、17日(金)に英1月小売売上高などの英主要経済指標の発表が控えるが、英経済の現状に対する通貨市場の関心は低く、ポンドが材料視する可能性は考え難いだろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(2/6~2/10)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2347 高値 1.2582 終値 1.2485

(対円) 安値 138.55 高値 142.38 終値 141.37



(資料) ブルームバーク

4. 豪ドル

為替営業第二チーム 島田 貴章

(1) 今週の予想レンジ: 0.7600 ~ 0.7850 86.00 ~ 89.00 円

(2) ポイント[先週の回顧と今週の見通し]

先週の豪ドル相場は、豪州準備銀行(RBA)の金融政策決定会合で予想通り現状の金融政策が維持される中、レンジ推移となった。週初6日、豪ドルは対ドル0.76台後半にてオープン。発表された豪12月小売売上高は前月比▲0.1%と事前予想(同+0.3%)対比で軟調な結果となったが、為替相場への影響は限定的となり0.76台半ばでのレンジ推移。翌7日、RBAの金融政策決定会合では政策金利を過去最低水準の1.50%に据え置くことを決定。一方で景気見通しでは楽観的な見方が目立ったことで、豪ドル相場は0.76台後半まで小幅に上昇。但し、一時的な値動きに止まり、その後は0.76台前半に水準を戻し、週安値0.7605をつけた。週央8日、目立った材料のない中で豪ドル相場は0.76台半ばを中心としたレンジ推移が継続。翌9日、ロウRBA総裁講演では、豪経済成長・資源輸出・インフレ動向などについて楽観的な見方が示されたが為替相場への影響は限定的。一方で米国時間には減税政策に関するトランプ米大統領発言が伝わりドル買いが強まると、豪ドル相場は小幅ではあるが軟化する場面も見られた。週末10日、RBA四半期金融報告書が公表されたが、先のロウ総裁講演などと整合的な内容であり、為替相場への影響は小さかった。米国時間に入るとトランプ政権による減税策への期待から米国株が上昇し、リスクオンの流れが強まると豪ドル相場は上昇。週高値となる0.7690をつけた後、0.76台後半にて越週した。一方、対円では週初6日に86円台半ばにてオープン。ドル/円相場の下落を受けて連れ安が続き、翌7日には週安値となる85.24円をつけた。7日、8日は同水準での推移が継続したが、9日以降はトランプ政権の減税策への期待を背景としたリスクオン相場により豪ドル/円相場は上昇。週末10日に週高値87.19円をつけた後、87円ちょうど近辺の水準にて越週した。

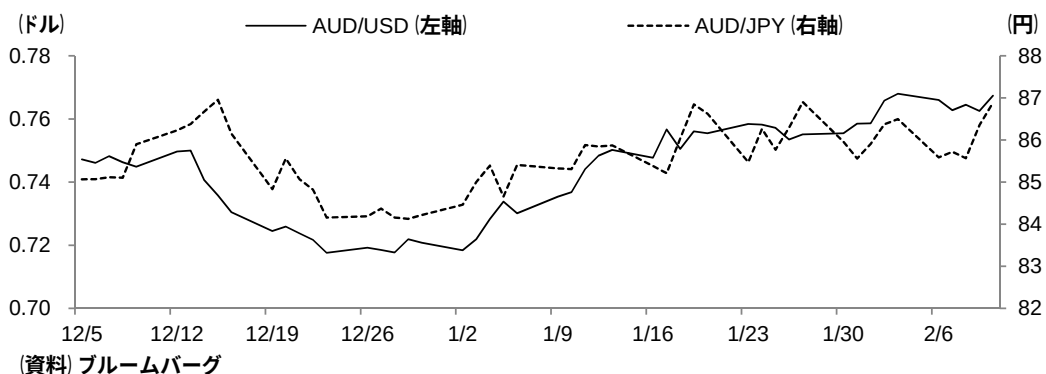
今週の豪ドル相場は底堅い展開を予想する。足許の注目はやはりトランプ大統領による減税政策の動向であろう。減税策に対する期待が豪ドル相場に与える影響は、大きく分けて①ドル買い圧力の増加に伴う豪ドル相場下落と②リスクオン相場に伴う豪ドル相場上昇という2つの経路が考えられるが、先週の動向を振り返れば後者の影響が勝る印象である。税制改革案が公表されるのは来週以降であり、それまでは現在の減税期待が継続すると考えられ、結果として豪ドル相場は底堅い展開が継続するだろう。一方で、複数予定されるFRB高官発言には注意を払いたい。特に14日(火)および15日(水)にはイエレンFRB議長講演が予定されており、リスクナリオではあるがタカ派的な内容が強く示された場合にはドル高の加速とリスクオン相場の巻き戻しにより、豪ドル相場が大きく調整する可能性がある点には注意を払うべきであろう。なお、そのほかの経済指標・イベントとしては、14日(火)に豪1月NAB企業信頼感、15日(水)に豪2月ウェストパック消費者信頼感、16日(木)に豪1月雇用統計および豪1月RBA為替取引などの発表が予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(2/6~2/10)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7605 高値 0.7690 終値 0.7678

(対円) 安値 85.24 高値 87.19 終値 86.89



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。